

源師房「初冬扈從行幸、遊覽大井河。応製和歌」序注(中)

A Commentary on Minamoto-no-Morofusa's "Preface to His Waka Poem Composed for the Imperial Waka-making Party While the Emperor and His Entourage Were Traveling around Oi River in Early Winter"——(2)——

鈴木 徳男
北山 円正

承保三(一〇七六)年十月に、白河天皇が嵯峨野・大井河に行幸した時に催した歌会の序を注する。本稿では段落の(4)(5)について行う。

(4) 夫れ鳳輦漸くほうれんやうやに揺れ、龍旗且つ進むりゆうきかつすすむ。境は都城さかひとじやうに近し、故に車馬しやばの費つひえ無く、路は山野さんやを経ふ、故に雉兔ちとの遊あそび有り。況むや瑠館ろうくわんに輿こしを駐め、華船くわせんに蹕ひつを移すをや。青苔せいはいの沙すなに纏しほるは、綺席きせきを洲渚しうしよに施かりくに似にたり、紅葉こうえふの水みづに瀉まそくは、貝錦ばいきんを江波かうはに濯あふが如し。加以初めは上源じやうげんを泝さかりて泛然はんぜんたり、後には下流かに沿そひて容与ようよたり。奇巖きがんに傍そひて崇岫すうしやうを仰あふげば、鹿鳴伶倫ろくめいれいりんの曲きよくに混ひたせ、迅瀨じんらいに棹さとして激湍げきたんを翫もてあそべば、漁火ぎよふくわん官人くわんじんの燈ひに代かはる。

大井河への行幸が始まる。途上での狩や現地での舟遊・奏楽、そして変わって行く遊覧の場の景色を進行とともに描いている。天皇が出遊の希望を関白左大臣藤原師実ふじのふみに語っていた時の、「荒楽」に向かうのではないかという不安

は、ここでは払拭されている。「夫」は、発語の助字。『文語解』(卷之四)には、「語端辭ト注ス篇首ノ発語ニ用ユ……篇中ニ一段端ヲアラタムル時コノ字ヲ用ユ」とある。

○夫^{スレ}拯^ス民於沈溺、奉^ス至尊之休德。(『文選』卷四十四、司馬長卿「難蜀父老」)

○夫和歌者、託其根於心地、発其花於詞林者也(『本朝文粹』卷十一、紀淑望「古今和歌序」)

「鳳輦」は、天子の乗る車。その屋根に鳳凰の飾りがある。

○四五老僧迎^ス鳳輦、久除^ス有結意恒空(『文華秀麗集』卷中、淳和天皇「扈從梵刹寺。応製」)

○鳳輦宴^ス酣方^ニ欲^ス幸、可^シ憐沛老狎^ス恩情(『本朝麗藻』卷上、藤原伊周「暮春侍宴左丞相東三条第、同賦度水落花舞。応製詩」。「新撰朗詠集」卷下・帝王)

落花舞。応製詩。『新撰朗詠集』卷下・帝王)

「龍旗」は、龍を描いた旗。天子の存在や威厳を示す。

○順^ス時服^ス而設^ス副、咸^ス龍旂^ヲ而繁^ス纓(『文選』卷三、張平子「東京賦」。薛綜注「龍旂者、交龍為旂也」。李善注

「毛詩曰、龍旗陽陽」)

○忝^ス天枝^ニ而披^ス露材^ニ之者惟少、尊^ス閣兼^ス之、佩^ス鵠印^ニ而拳^ス龍旗^ニ之者亦稀、相^ス府兼^ス之(『本朝統文粹』卷九、藤

原明衡「冬日陪内相府書閣、同賦落葉浮湖水。応教詩」序。『詩序集』下)

以上の二句は、天皇の車やその一行が大井河へ向かう途上の様子を描写している。

「境」は、場所、地域。大井河の流域や嵯峨野一帯。「都城」は、都、京城。

○及其抗^ス衡上^ス国、与^ス晉争^ス長、都^ヲ城^ヲ屠^ス於^ス勾^ス踐(『文選』卷四十四、陳孔璋「檄吳將校部曲文」)

○都城之南、有二^ノ廟宇(『本朝統文粹』卷八、藤原敦基「春陪吉祥院聖廟、同賦桜花殘古社詩」序)

○境近^ス都門、往^ル來未^レ過^ス一里^ノ之際、処^ニ如^シ仙洞、煙霞猶^レ殘^ス三春^ノ之光(『扶桑古文集』藤原令明「暮春於城南別

業、同賦仙家春未^レ尺詩」序)

「境近 都城」とあるように、遊覧する嵯峨野・大井河のあたりは、都の近郊である。

○何処秋情不可涯、嵯峨曠野近。京華（『江吏部集』卷上、「嵯峨野秋望」）

「車馬之費」は、車や馬を用いるために要する経費。近郊への出遊であるので、あまり費用はかさまないと言う。この一句と対をなす「故有雉兔之遊」の直接の典拠は、

○若夫終日馳騁、勞神苦形、罷車馬之用、抗士卒之精、費府庫之財、而無德厚之恩、務在「獨樂、不顧衆庶、忘國家之政、貪雉兔之獲、則仁者不繇也」（『文選』卷八、司馬長卿「上林賦」）

であり、このほかには、行幸を止めて莫大な支出を抑えた天子を称える、「新樂府」の、

○六宮從兮百司備。八十二車千萬騎、朝有宴飮暮有賜。中人之產數百家、未足充君一日費。（『白氏文集』卷四・0145、「驪宮高」）

も、語句の重なりからすると念頭にあったであろう。「路經山野」は、大井河への道は山や野原を通るといふこと。「雉兔」は、キジとウサギ。

○十月鷹出籠、草枯雉兔肥。（『白氏文集』卷一・0039、「放鷹詩」）

○綠耳馳蹄、驅麋鹿以雨血、青駁在臂、逐雉兔而風毛。（『本朝統文粹』卷十二、藤原敦光「白河法皇八幡一切經供養願文」）

「雉兔之遊」は、狩獵。ここは右の「上林賦」に基づく。山野を經て行くので、狩を兼ねられると述べている。別途獵をするのではないため、それだけ費用を掛けずにすむことになる。近隣への遊覧であれば出費を抑えられると言ふのとともに、白河天皇が危惧した「荒樂」には、実際に陥っていないことを説明したことにもなる。

「況乎」は、まして……の場合にはなおさらだ。直前の四句を承けて、この場合でも経費節減しているのであるから、次の場合は言うまでもなく奢侈に向かわず節約しているのだと述べている。

○況乎代主制命、自下財物者哉（『文選』卷四十六、陸士衡「豪士賦序」）

○況乎匡衡以文章奉公之功、於當時異他人矣（『本朝文粹』卷六、大江匡衡「請特蒙天恩、依尾張国所濟功并侍読勞、被拜美濃守闕狀」）

「瑠館」は、裝飾を施した建物。用例未見。「瑠」は、玉を研く、彫る、飾る。『篆隸萬象名義』（第一）には、「雕也、彫也」とある。用例未見。「輿」は、天子の乗る車。観智院本『類聚名義抄』（僧中）の訓に「コシ、ミコシ、コシグルマ」がある。「駐輿」は、車をとどめること、天皇が滞在すること。

○廻輿駐罕、嶽鎮淵淳（『文選』卷四十六、王元長「三月三日曲水詩序」）

○忽看烏瑟三明影、暫駐鸞輿一日蹤（『新撰朗詠集』卷下・帝王、後冷泉院「宇治行幸詩」）

「華船」は、美しく飾った船。

○水駅路穿児店月、花船棹入女湖春（『白氏文集』卷五十七・2787「送劉郎中赴任蘇州」。「千載佳句」下・

水行、「和漢朗詠集」卷下・水）

○脂金車兮過郊野之路、棹華船兮縈蘆葦之叢（『本朝統文粹』卷十、源經信「春日住吉行旅述懷。応太上

皇製和歌」序）

「蹕」は、道行く人の足を止めて貴人の行列を通すこと。『篆隸萬象名義』（第二）に「止行也」とある。ここは天子の車の意に取るべきであろう。「移蹕」は、天子の車を移動する意。ここでは天皇が船遊びすること。

○暫擬震居、便移仙蹕（『本朝統文粹』卷九、藤原義忠「暮春侍宴、同賦花樹遶池岸。応製詩」序）

「況乎」以下は、天皇が「瑠館」や「華船」にいるのについても、乗り物と遊獵の場合と同様、無駄のないように勉めているのもちろんであると、この行幸の姿勢を重ねて強調している。

「青苔」は、青々とした苔。以下四句は大井河の風景を描いている。「青苔」と二句あとの「紅葉」とが対をなす例

は次のとおり。

○鳥栖紅葉樹、月照青苔地〔『白氏文集』卷十四・0752、「秋思」〕

○踏紅葉、而尋逕、占青苔、而昇階〔『本朝文粹』卷十、源英明「冬日遊円城寺上方」詩序〕

○白霧籠山紅葉尽、蒼波洗岸青苔寒〔『本朝無題詩』卷五、藤原忠通「冬夜言志」〕

「纈沙」は、砂の上に絞り染めをする。そのように川辺の砂に苔が生えている。

○黄夾纈林寒有葉、碧瑠璃水浄無風〔『白氏文集』卷五十四・2443、「泛太湖書事、寄微之」。『千載佳句』上・初冬、「和漢朗詠集」卷上・紅葉〕

○乍訝簪投地、那知纈曝場〔『田氏家集』卷之下、「禁中瞿麦花詩三十韻」〕

○纈地晴煙沙草嬾、随風春雪苑花零〔『本朝無題詩』卷四、藤原明衡「暮春即事」〕

次の句は、底本には「施綺席於洲渚」とある。対をなす「如濯貝錦於江波」と並べてみると、「如」に相当する一字がない。欠字となっているこの箇所を、(版)の「似」で補った。「綺席」は、あや絹の敷物、美しく飾った敷物。「綺」は、『新撰字鏡』(巻四)に「繪也、繡也。阿也」とある。「青苔」が生えているのを敷物に見立てた。

○青鑑絶沈燎、綺席生浮埃〔『文選』卷三十一、江文通「雜体詩三十首」ノ「休上人怨別」。李善注「西京雜記、鄒陽酒賦曰、綃綺為席、犀璫為鎮」〕

○漢旧儀曰、祭天、紫檀紺席、六采綺席。祭獄、白菅席〔『初学記』卷二十五・席〕

○綺席已煖、碧窓欲明〔『本朝文粹』卷八、紀齊名「三月尽、同賦林亭春已晚、各分一字。応教」詩序〕

「洲渚」は、川の中の島、中洲。

○鳥嶼綿邈、洲渚馮隆〔『文選』卷五、左太冲「呉都賦」。劉淵林注「水中可居曰洲、小洲曰渚」〕

○終日踏洲渚之沙、無由過野田之草〔『紀家集』卷十四、「昌泰元年歲次戊午十月廿日競狩記」〕

○望海上之飛帆、翫洲渚之群鶴。(『本朝無題詩』卷一、藤原忠通「詠・画障詩六韻」詞書)

この二句のように「苔」が生えているのを「席」を敷いていると描く例は、しばしば見られる。『文鳳抄』(巻八・苔)には、「煙……席。茵……皆以一字有苔意」とある。

○鄰荒収酒幔、屋古布苔茵。(盛唐顧況「送友失意南歸」)

○夜深苔席。松月眠、出洞孤雲到枕辺。(『経国集』卷十四、嵯峨上皇「青山歌」)

○休世夢、斷塵縁。莓苔唯展坐禅筵。(『本朝文粹』卷一、紀長谷雄「山家秋歌」ノ三)

○燈明送夜窓間月、座席経年砌下苔。(『本朝無題詩』卷十、藤原明衡「春日遊雲林院西洞」)

この見立てについては、竹下豊『堀河百首』の「苔」題の歌をめぐって(『女子大文学 国文篇』第五十六号)参照。

次の二句「紅葉瀉水、如濯貝錦於江波」に類似した表現には、

○或流為蜀江、紅葉浮而濯錦。或瀉為酈谷、黃菊映而沈金。(『本朝文粹』卷十、慶滋保胤「冬日於極楽寺禪房、同賦落葉声如雨」詩序)

がある。「瀉」は、水などを流しかける。ここは「紅葉」が水面に降りそそぐのであつて珍しい例と言えよう。ただ保胤の詩序は菊花の場合であり、『扶桑古文集』に引く歌題「夏日詠藤花瀉水ふたば和歌」(大江家国)のように藤の花について言うこともある。国史大系の本文(底本は内閣文庫本)は「浮」とし、頭注に「浮、原作瀉、今従活本」と校訂の理由を述べている。保胤の詩序「或流為蜀江、紅葉浮而濯錦」に基づけば、「浮」とあつてもよいが、右に挙げた例があるのであえて底本を改める必要はないだろう。観智院本「類聚名義抄」(法上)には、「ソ、ク」の訓がある。「濯貝錦」を、底本は「貝濯錦」に作る。これでは意味をなさないので、(版)によって改めた。「濯」は、あらう、すすぐ。『篆隸萬象名義』(第五)には、「洗」、「新撰字鏡」(巻六)には、「滌也…洗足也…澣也」とある。

○吹入江中。如濯錦。乱飛機上奪文紗。〔文華秀麗集〕卷下、藤原冬嗣「奉和河陽十詠二首」ノ「河陽花」

○如遇吳娃露汗立、似看蜀錦濯江沈。〔菅家文章〕卷六、「早春侍朱雀院、同賦春雨洗花。応太皇製」

〔貝錦〕は、貝殻の錦のように美しい模様。「如濯貝錦於江波」は、次の「蜀都賦」に基づく。

○貝錦斐成、濯色江波。〔文選〕卷四、左太冲「蜀都賦」。劉淵林注「貝錦錦文也。譙周益州志云、成都織錦既成、濯於江水、其文分明、勝於初成、他水濯之、不如江水也」。李善注「毛詩曰、萋兮斐兮、成是貝錦也」。五臣注「貝錦織文也」

○月花遍臨、似整鸞鏡於廻塘之裏、風葉旁散、如裁貝錦於攢枝之間。〔詩序集〕下、藤原明衡「秋日侍右相府書閣、同賦林池秋色多。応教」

〔江波〕は、河に立つ波。

○馮仗江波寄一辞、不須惆悵報微之。〔白氏文集〕卷五十三・2356、「重寄別微之」

○漁人棹而高歌、江波水潔、苻馬嘶而欲惑、野草霜深。〔本朝文粹〕卷八、紀齊名「仲秋陪中書大王書閣、同賦望月遠情多。応教」〔詩序〕

この二句のように「紅葉」を「錦」と見立てる表現は、中国の詩文にないと言われることがあるが、盛唐杜甫には、

○江上亦秋色……巫山猶錦樹。〔復愁十二首〕ノ十

○霜凋碧樹待錦樹、萬壑東逝無停留。〔錦樹行〕

とある。日本では、

○天紙風筆画_レ雲鶴、山機霜杼織_レ葉錦。（『懷風藻』、大津皇子「述_レ志」）

○秋過_レ其道者、千樹錦集。（『常陸国風土記』・香島郡）

などと古くから例があり、平安時代に入ってから多数現れる。

○秋錦開_レ林、遊人不_レ倦（『性靈集』卷二、「大和州益田池碑銘」序）

○雁飛_レ碧落書_レ青紙、隼擊_レ霜林破_レ錦機。（『田氏家集』卷之中、「秋暮傍山行」）

○孤立如_レ逢衣_レ錦客、四分疑_レ伴散_レ花僧（『菅家後集』、「冬日感_レ庭前紅葉、示_レ秀才淳茂」）

○野樹班班紅_レ錦装、惜_レ来爽候欲_レ闌光（『新撰万葉集』卷上・秋歌）

やがてこの見立ては、和歌において、

○ひぐらしに秋の野山をわけ来れば心にもあらぬ錦をぞ着る（『寛平御時后宮歌合』秋歌・左・八四、『新撰万葉

集』卷上・秋歌・一一一）

○竜田川紅葉乱_レれて流るめり渡らば錦中やたえなむ（『古今集』卷五・秋下・二八三）

と、『古今集』以後頻繁に用いるようになる。この見立てについては、本間洋一「王朝漢詩の表現世界——王朝詩と白詩と——」（『王朝漢文学表現論考』所収）・鈴木宏子「へ紅葉と錦の見立て」考——和歌と漢詩文の間」（『古今和歌集表現論』所収）参照。「青苔纈_レ沙」以下の四句は、「洲渚」に生えた「青苔」を敷物と、「江波」に注ぐ「紅葉」を錦と見立てることによって、無駄な出費をしなくてもこと足りていると述べている。

「加以」は、その上、それに加えて、ひきつづいて。釈大典『文語解』（卷之二）には、「加_{マタ}クハユルノ義ヨリ転ス。又ノ字ニ似テ又ヨリ重ク又ヨリ狭シ……加之・加以ト用ルコト多シ……当_チ此之時、宮亡_レ儲主、董賢_レ抱重_レ加以_レ傅氏有女之援_レ（へ王莽伝）。獲_レ師傅之教_レ浅_レ、加以_レ少_レ所聞_レ（へ宣元六王伝）」とある。『類聚名義抄』（僧上）の訓には、「シカノミナラス」がある。「況乎」以下の六句を承けてなおも述べるのは、この行幸の節約についてである。直

前の四句につづけて、さらに船の中から見た大井河周辺の景色や遊びの模様を描いている。

- 河流過疾、道阻且長。加以伊洛榛蕪、津塗久廢。〔文選〕卷三十八、傅季友「為宋公至洛陽謁五陵表」
- 加以物色相召、烟霞有奔命之場、山水助仁、風月無息肩之地。〔懷風藻〕、下毛野虫麻呂「秋日於長王宅、宴新羅客」序

〔泝〕は、さかのぼる。溯と同じ。『篆隸萬象名義』(第五)には、「逆流上」とある。底本は「サカノホテ」を傍記している。

- 憤西夏以鞠旅、泝秦川而拏旗。〔文選〕卷六十、陸士衡「弔魏武帝文」

○能知人意狎不去、或泝或沿与波遊。〔文華秀麗集〕卷下、朝野鹿取「奉和河陽十詠二首」ノ「水上鷗」

〔上源〕は、上流。

- 阿膠在末派、罔象游上源。(中唐元稹「賽神」)

〔泛然〕は、舟の浮かぶさま、ゆつたりと浮かび漂うさま。

- 泛然独遊邈然坐、坐念行心思古今。〔白氏文集〕卷六十二・3035、「池上作」

○篋筌蘆蘆宇治川、泛然相憶古神仙。〔本朝麗藻〕卷下、藤原伊周「与諸文友、泛船於宇治川、聊以逍遙」

○泛然不盡舟中興、此処帰歟及下春。〔本朝無題詩〕卷六、釈蓮禪「冬日宇治別業即事」

〔沿〕は、流れに従う、流れに従って下る。『篆隸萬象名義』(第五)に、「従流而下」とある。例は、「泝」で引いた『文華秀麗集』参照。「容与」は、ゆつたりとしたさま、悠然とした状態。底本が「客輿」に作るのを、(蓬)(版)によつて改めた。天皇たちはのんびりした船遊びをしている。

- 船容与而不進兮、淹回水而疑滯。〔文選〕卷三十三、屈平「九章」ノ「涉江」。五臣注「容与徐動兒」
- 舞袖飄飄棹容与、忽疑身是夢中遊。〔白氏文集〕卷五十八・2878、「府中夜賞」

○王船（舟）纒（つむぎ）兮未（な）出、春棹容（かた）与（と）。沙涯之間、孫帷垂兮猶眠、曉夢芬（ほ）芳書帙之下（もと）。〔新撰朗詠集〕卷上・花、紀育名
「入（い）夜花如（ごと）雪」

「奇巖」は、珍しい形の石、風情のある岩石。この一句は川の近くの光景を描いている。

○奇巖怪石之千象万形、靈樹異草之大隱無名〔本朝文粹〕卷十、慶滋保胤「冬日於極樂寺禪房、同賦落葉声如（ごと）雨」詩序）

○嶋中攢（あ）生花樹芳草、岸辺双（た）立貞松奇巖。〔扶桑古文集〕、大江千里「三月三日、吏部王池亭会」和歌序）

○春尋幽寺上山嶺、滿眼奇巖与噴泉。〔本朝無題詩〕卷八、源経信「遊長樂寺」

「崇岫」は、高い峰。

○臨（み）濬壑（た）而怨（う）遙、登崇岫（た）而傷（あ）遠。〔文選〕卷十三、謝希逸「月賦」。五臣注「崇高也」

「鹿鳴」は、鹿の鳴くこと、鹿の鳴き声。底本が「鹿鳴」に作るのを、（版）によつて改めた。

○呦呦鹿鳴、食（を）野之萃（は）。〔毛詩〕小雅・鹿鳴之什・鹿鳴）

○暎露鹿鳴花始發、百般攀折一枝情。〔新撰万葉集〕卷上・秋歌。〔和漢朗詠集〕卷上・萩）

○晚霞影輕、漫埋（を）出峽之猿叫、暎雨声冷、暗洗（を）在林之鹿鳴。〔本朝文粹〕卷十、高丘相如「初冬於長樂寺、

同賦落葉山中路」詩序）

また、延暦十七（七九八）年八月十三日の遊獵後の宴で、桓武天皇が鹿の鳴き声を聞くまでは帰るまいと歌うと、たちまち鹿が鳴いたという次の逸話が想起される。

○庚寅、遊（を）獵於北野。便御伊予親王山莊、飲酒高会。于（に）時日暮、天皇歌曰、

けさの朝け鳴（な）くちふ鹿のその声を聞かずは行かじ夜はふけぬとも

登時鹿鳴、上欣然。令（を）群臣和（は）之。冒（を）夜乃歸。〔類聚国史〕卷三十二・天皇遊獵）

「混」は、まじる、一つになる。『類聚名義抄』（法上）には、「ヒタ、ケテ」の訓がある。

○齊竿混。韶夏、燕石厠アハル、琳琅アハル。「白氏文集」卷十五・087、「渭村退去、寄礼部崔侍郎・翰林錢舍人詩一百韻」

○便混。商風添雅韻、遙辭朔土入華声。「新撰朗詠集」卷上・雁、源時綱「雁声遠和琴」

「伶倫」は、黄帝の臣下で、嶰谷ハクの竹を切つて吹き楽律を製した人。ここでは楽人の意。

○呂氏春秋曰、昔黄帝命伶倫為律。伶倫自大夏之西、阮隰之陰、取竹之嶰谷、断兩節間、長六寸九分而吹之、為黃鍾之宮。律之本也（『芸文類聚』卷八十九・竹）

○別命伶倫、整理音楽、兼令舞人尽其妙曲（『本朝文粹』卷十三、大江維時「村上天皇、供養雲林院御塔願文」）

○整伶倫於龍舟、自調春波之妙曲、扱墨客於鳳筆、皆鑿夜月之明文（『江吏部集』卷下、「暮春侍宴左丞相東三條第、同賦渡水落花舞。応製」詩序。『本朝麗藻』卷上。『本朝文粹』卷十）

鹿の鳴き声が、天皇に随行した楽人の奏でる音色と混じり合つて聞こえてきたのである。「棹」は、棹で水底を突いて船を進める、船をこぎ進めること。

○策細馬而觀覽、棹輕舟而泛遊（『本朝文粹』卷十一、源道濟「初冬泛大井河、詠紅葉蘆花和歌序」）

○策緑耳而望山村、則林風之声蕭策、命黄頭而棹水郷、亦沙煙之色眇茫（『本朝統文粹』卷十、藤原国成「初冬於大井河、詠紅葉和詩」序）

「迅瀨」は、流れの速い川、早瀨。

○松低老葉危巖下、水噴寒花迅瀨間（『菅家文章』卷三、「衛後勸諸僚友、共遊南山」）

○和風扇兮粧弥乱、迅瀨咽兮影不閑（『本朝文粹』卷十、源順「暮春於浄園梨洞房、同賦花光水上浮」詩序）

○始則鏡、舳艫而沂迅瀨、糸竹緩調、後亦纜、驂駟而望寒郊、冠蓋相從〔扶桑古文集〕、慶滋為政〔秋日臨大井河、紅葉泛水。応令歌〕序)

〔激湍〕は、川の速い流れ、急流、早瀬。川に船を漕ぎ出し、急流を楽しんでいる。

○交渠引漕、激湍生風〔文選〕卷十、潘安仁〔西征賦〕

○或鋪為慢流、或激為奔湍。〔白氏文集〕卷六・0264、〔遊悟真寺詩、一百三十韻〕

〔漁火〕は、いさり火。夜になって川で漁が始まった。

○窺潜魚以漁火、暈、逐帰鳥以釣帆孤〔菅家文章〕卷七、〔秋湖賦〕。〔本朝文粹〕卷二

○虬漏漸転、蘆洲之漁火、烧波、鴛鴦欲帰、松門之驪驪動駕〔本朝統文粹〕卷八、大江佐国〔暮秋陪大長秋員

外藤相公城南別業即事。応教詩〕序)

〔官人〕は、役人。白河天皇の供をしている朝廷の役人たち。「漁火代官人之燈」は、漁船の焚く火が、「官人」たちの点す燈火の代わりになったということ。

○代火輝霄、逐風廻洛浜〔懷風藻〕、文武天皇〔詠雪〕

○山雲繞舍、窓裏幔、澗月臨窓欲代燈。〔本朝麗藻〕卷下、藤原為時〔題玉井山庄〕

〔加以〕以下の六句は、船遊びにおける奏楽では鹿の鳴き声が加わり、夜に入って漁り火が自分たちの燈火となっていると、ここでも節減しても興趣があるのだと強調している。音楽・燈火どちらについても、新たに人を揃え道具などを用意せずとも間に合ったことを言わんとしているのである。④の段落は、行幸の模様を順次描きながら、以上のように一貫して冗費を省いていることを主張しているのである。②において白河天皇が、陥るかもしれないと危惧していた「荒楽」は、見事に回避されたのであった。

(現代語訳)

さて帝の車は揺れながら向かい、帝の旗もまた進み行く。大井河のあたりは都から近いところにある、それで車や馬に経費はかからない、道は山野を通るので、狩猟の遊びも併せてできた。言うまでもなく、装飾を施した建物に天皇の輿を駐めたり、美しい船に天皇の乗り物を移す場合も同様なのである。青い苔が川辺の砂を絞り染めになっているのは、あや絹の敷物を川の中洲に敷いたかのような、紅葉が水面に降り注いでいるのは、錦の織物を川の流れて洗うかのごとくである。河の風情はこれだけではない、初めは上流へ溯って船をゆったりと浮かべ、後には下流へ向かってのんびりと漂ったりした。奇怪な岩に寄って高い峰を見上げると、鹿の鳴き声が楽人の奏でる音曲と混じり合い、早瀬に船を漕ぎ出して急流を楽しんでいるうちに、漁り火が官人の点す燈火に代わっていたりするのである。

(5)

既にして皇^す歡^{くわく}の^{わん}猷^あくこと無^なきを^を驚^{おどろ}かし、華^{くわ}蓋^{がい}を^を促^{うなが}して^{かへ}帰^{かへ}らむとす。山^{さん}嵐^{らん}頻^{しき}りに^つ報^つげて、^み聞^みに入る^いる^も者は^も万^{ばん}歳^{ざい}の^あ声^{こゑ}、河^か水^{すい}一^{いつ}たび^と清^すみて、^{まなこ}眼^{まなこ}に^み満^みつる^も者は^も千^{せん}秋^{しゅう}の^{いろ}色^{いろ}。山^{さん}水^{すい}の^{かきゅう}嘉^{かきゅう}貺^あ、^{まこと}誠^{まこと}に^{ゆえ}以^{ゆえ}有^ある^あかな。

時が過ぎて都へ帰るように天皇を促すと、山河に瑞祥が現れたと述べて、聖代を讚美する。「既而」は、すでに、そのうちに、かくして。『訓詁示蒙』(巻五)には「ホドアツテト云フ意ナリ」、『助語審象』(巻之中)には「ソノコトノアトデ外ノコトヘ転ゼシナリ」とある。ことの進行に新たな展開があることを示す場合に用いる。遊覧も終わりを迎えたのである。

○既^み而^み而^み氛^{ふん}昏^{こん}夜^や歇^{せつ}、景^{けい}物^{ぶつ}澄^{じやう}廓^{くわく}〔『文選』卷十四、鮑明遠「舞鶴賦」〕

○既^み而^み而^み玉^{ぎよく}爵^{かく}飲^{いん}酣^{かん}、金^{きん}鳥^{てう}影^{えい}暮^ぼ〔『本朝文粹』卷九、紀在昌「北堂漢書竟宴、詠史得蘇武」詩序〕

「皇歡」は、天子の喜び。

○萬樂備、百礼饗、皇歡、群臣醉、降煙燭、調元氣(『文選』卷一、班孟堅「東都賦」。五臣注「言、天子之歡霑及、群臣皆醉、和樂之氣、感天而降、煙燭」)

○皇歡爰發、歡興自生(『經国集』卷一、菅原清公「重陽節神泉苑、賦秋可哀。応制」)

○逖使禎祥不_レ休、能叶帝德之美、符応有_レ信、自固皇歡之基(『本朝文粹』卷三、大江匡衡「寿考」对策文)「無厭」は、飽くことのない、満足することのない。「厭」は、『篆隸萬象名義』(第三)に「飽也」とある。「厭」に同じ。この一句は、まだ遊覽に飽きてはいない天皇に、帰る時であることを気付かせると述べる。

○得九月二十日書、読_レ之喜笑、把玩無厭(『文選』卷四十一、陳孔璋「為曹洪与魏文帝書」)

○梵語聞無厭、塵心伏不驚(『文華秀麗集』卷中、多治比清貞「遊北山寺」)

「華蓋」は、華蓋星。この星を天子の車に掛けるかさに見立てる。ここでは天皇の車の意。「促華蓋」は、天皇の車をせき立てる。帰りを急かす。

○華蓋承辰、天畢前驅(『文選』卷二、張平子「西京賦」。薛綜注「華蓋星覆北斗。王者法而作_レ之」。李善注「劉歆遂初賦曰、奉華蓋於帝側」)

○華蓋何曾惜、金丹不致功(『白氏文集』卷二十・1375、「新秋病起」)

「山嵐」は、山に立ちこめる気。ここでは山に吹く激しい風。『經国集』(卷十四)滋野貞主「奉和漁歌五首」ノ三に、「砂巷嘯、蛟浦吟、山嵐吹送入单衿」とある。その注である、小島憲之「国風暗黒時代の文学 下Ⅲ」(四二二〇ページ)参照。

○花落能紅復能白、山嵐類下萬條斜(『文華秀麗集』卷下、嵯峨天皇「河陽十詠四首」ノ「河陽花」)

○夫海非人力之所成、白塩尽兮海岸遺_レ体、山是地勢之自得、碧巖高兮山嵐伝_レ声(『本朝文粹』卷十、源順「三

月三日、於西宮池亭、同賦「花開已匝樹。応教」詩序

○臨池水而森森、自添千秋之色、迎山嵐而颯颯、処動万歲之声。「扶桑古文集」、大江匡房「春日同詠」松契
 還年。応教和歌」序

对をなす「入聞……満眼」は、『本朝文粹』(卷二)紀齊名「落葉賦」の「繽紛満眼、類弘翡翠之簾、散乱入
 聞、幾点鴛鴦之瓦」に拠る。「入聞」は、聞こえてくる、耳にはいる。

○秋冷方知意鬱陶、終夜入聴耳嘈嘈。「法性寺殿御集」、「入聴秋方冷」

「山嵐」が告げる「万歳之声」とは、漢の武帝が嵩高山に登った時、万歳の声が聞こえてきたという故事に基づく。
 『初学記』(卷五・嵩高山)に、「統漢書云、漢武帝礼登中岳、聞言萬歳声上三。於是三以三百戸封、奉祠。命曰
 嵩高邑」とある。また、『世俗諺文』(上卷)は、

○山呼万歳 史記云、漢武帝、元封元年三月、東幸緱氏、登礼中嶽大室。從官在山下、聞若言万歳。上
 問上上不言。問下下不言。於是三以三百戸封大室、奉礼命曰崇高邑。漢書祀志云、帝幸緱氏、祀登中
 岳太室。從官在山上、聞若言万歳。問上上不言、問下下不言。乃令祠官加增大室。

と、典拠を詳しく記す。『延喜式』(卷二十一・治部省)は「祥瑞」(大瑞)の一つに、「山称萬歳」を挙げている。

○帝与九齡雖吉夢、山呼萬歳是虚声。「白氏文集」卷六十八・3454、「開成大行皇帝挽歌詞四首」ノ四

○山呼万歳 空無識、水号千秋未足要。「本朝麗藻」卷下、大江以言「夏日陪於員外端尹文亭、同賦」泉伝
 万歳声。詩)

○鴨河東流、一清之色浪静、龜山西峙、万歳之声風伝。「本朝文粹」卷十一、藤原有国「讚法華經廿八品和歌
 序」

○汾水虚舟之遊、波澄一清之色、射山脱屣之跡、嵐報万歳之声。「朝野群載」卷三、「北辰祭文」

右の「山嵐」の用例として引いた、源順の詩序と大江匡房の和歌序も参照。また和歌においても、同様の表現が見られる。

○岸のくる水色清う澄み、山の声高う呼ばふ（『兼盛集』一、「子日行幸奉和歌序」）

○みの日のまゐり音声、いはねやま

雲の上八百万代と呼ばふなりこれやいはねの山にはあるらん（『江師集』三七一、「風俗歌十首」ノ七）

「河水一清」は、千年に一度黄河の水が澄んで聖人が現れるという瑞祥を踏まえている。

○天長地久歳不_レ留、俟_{マナ}河之清。祇_{タケ}懷_ニ憂（『文選』卷十五、張平子「思玄賦」。李善注「左氏伝、子駟曰、周諺有之、曰、俟_ニ河之清、人寿幾何。杜預曰、逸詩也。言、人寿促而河清遲也。京房易伝曰、河千年一清」。五臣注「黄河千年一清、以喻_ニ明時也。言、天地長久、而人易_レ老。明時如_ニ河清難_レ待、祇_レ令我懷_レ愁也」）

○夫黄河清而聖人生、里社鳴而聖人出（同卷五十三、李蕭遠「運命論」。李善注「易乾鑿度曰、聖人受_レ命、瑞応先見於河。河水先清、清変_レ白。白変_レ赤、赤変_レ黒、黒変_レ黄。各三日」。五臣注「黄河千年一清、清則聖人生於時也」）

『世俗諺文』（上巻）には、

○俟_ニ河之清。丹丘千年一燒、黄河千年一清。今案云、同趣也。出_ニ王子年拾遺記第一。周易云、千年一聖人生則黄河清。

とあり、このあと右の張平子「思玄賦」李善注に引く、『春秋左氏伝』（襄公十八年）がつづく。さらに、「黄河清而聖人生」の項目があり、ここには右の李蕭遠「運命論」とその李善注を引用している。また、『延喜式』（卷二十一・治部省）でも、「祥瑞」（大瑞）の一つとして、「河水清」を挙げている。

○河水雖濁有清日、烏頭雖黒有白時（『白氏文集』卷十二・0599「潜別離」）

○山無[△]蓄韻、春風猶揚[△]三呼之聲[△]、河有[△]定期、秋水暗表[△]、清之色[△]（『本朝統文粹』卷四、大江匡房「復辞第二表」）

○象岳之上、山引[△]三呼之嵐[△]、濟川之中、水俟[△]清之浪[△]（同卷十二、大江匡房「子息等賀左大臣七十算」願文）

○水遇[△]清沙月影、山称[△]万歳嶺嵐声[△]（『本朝無題詩』卷一、藤原知房「行幸平等院」）

奈良時代の和歌や歌謡においても、

○ 暮春之月、幸[△]芳野離宮時、中納言大伴卿、奉[△]勅作歌一首。并[△]短歌。未[△]逕奏上歌。

昔見し象の小川を今見ればいよさやけくなりけるかも（『万葉集』卷三・三二一）

○葛井・船・津・文・武生・蔵六氏男女二百卅人、供[△]奉歌垣……其歌垣歌曰、

淵も瀬も清くさやけし博多川千歳を待ちて澄める川かも（『統日本紀』神護景雲四^〇七七〇^〇年三月二十八

日）

などと、その受容が見られる（それぞれ、村田正博「旅人「吉野讚歌」の位置——「天地と長く久しく」を中心に——」

（『萬葉の歌人とその表現』所収）、高松寿夫「由義宮歌垣の歌謡——「淵も瀬も」歌謡の解釈を中心に——」（『萬葉』第一八二号）などに言及がある）。平安時代では、

○ 円融院御時、堀河院にふたたび行幸せさせたまひけるによめる 曾禰好忠

水上をさだめてければ君が代にふたたびすめる堀河の水（『詞花集』卷十・雑下・三八五、『和漢朗詠集』卷下・水）

○朝夕に喜ばしきこと有栖川、ひとたび澄める水の心のどけき世に（『栄花物語』・駒競の行幸）

などがある。「満眼」は、見渡す限り、目に映るすべて。直接には、対をなす「入聞」とともに、先に引いた紀齊名「落葉賦」（『本朝文粹』卷二）を典拠とする。

○満眼。雲水色、月明楼上人（『白氏文集』卷十三・0680、「江楼望婦」）

○潮平月落婦何処、満眼魚蝦満地蒿（『菅家文章』卷五、「漁父詞」）

「千秋之色」は、目に映る澄んだ大井河がとこしえの色を湛えていることを言う。

○千秋之岸、鑑以無私、萬年之枝、攀以有節（『江吏部集』卷上、「夏日陪左相府書閣、同賦水樹多佳趣。応教」詩序。「本朝文粹」卷八）

○臨池水而森森、自添千秋之色、迎山嵐而颯颯、処動萬歲之聲（『扶桑古文集』、大江匡房「春日同詠松契」退年。応教和歌」序）

この四句は、山からは白河天皇の治世をことほいで「万歳」の聲が聞こえ、川は聖主の出現を待ち付けて澄んで永遠の色を現すと述べている。序者は、瑞祥が立ちあらわれたと述べて、今の御代を讚美しているのである。

「山水」は、直前の「山」と「河水」を承ける。

○非必糸与竹、山水有清音（『文選』卷二十二、左太冲「招隱詩二首」ノ一）

○山水秋深、若雲夢者有八九、煙風日暮、記風物以難（『江吏部集』卷中、「暮秋泛大井河、各言所懷和歌序」。「本朝文粹」卷十一）

「嘉祝」は、よいいただき物、よい贈り物。山と河の示す瑞祥を「嘉祝」と呼んだ。

○嘉祝益腆、敢不欽承（『文選』卷四十二、魏文帝「与鍾大理書」。五臣注「祝賜」）

○極壽命之遙涯、保福祚之嘉祝（『本朝文粹』卷十一、紀長谷雄「第三皇子加元服祝文」）

○今之嘉祝、尤可珍重（『本朝統文粹』卷七、藤原明衡「曾使頭旅亭」書状）

「誠有以哉」は、なるほど理由があつてのことだ。詩序にしばしば見える、感嘆の常套句。「以」は、理由、わけ。観智院本『類聚名義抄』に、「ユヘ」（佛上）の訓がある。山水が瑞祥を現すのは、それだけの理由がある。ここでの

「以」は、(4)に述べた無駄な出費を控える天皇の配慮である。行幸に貫かれているこの姿勢に聖帝の出現を見出し、おり、聖代であるから瑞祥が示されると納得しているのである。

○是以左親衛藤次将、与同志者五六輩、命駕於此、誠有以哉。〔本朝麗藻〕卷上、源孝道「暮春於白河」、同賦「春色無辺畔」詩」序

○居文武之二府、兼荣貴於門、未如我相府矣。今之良宴、誠有以哉。〔本朝統文粹〕卷十、藤原有信「冬日陪内相府書閣、同賦酌酒对残菊。应教詩」序

(現代語訳)

やがて主上のお喜びが飽くことなくつづくのを驚かし、お車をせき立てて帰ろうとした。すると山の激しい風が頻りに知らせて、御代を寿ぐ万歳の声が耳に入り、河の水が澄んで、聖帝を称える永遠の色が目のおおつた。山や河にこのようなめでたい賜物が現れるのは、まことにそうなる理由があるのだ。